

裁縫雛形を用いた裁縫教育の実態について

— 大正7年卒業生の製作品比較を通して —

三友 晶子

A study of the sewing education system using *Saiho-Hinagata*:

A comparison between the two 1918 graduates' work

Shoko MITOMO

1. はじめに

東京家政大学博物館では、明治30年頃から昭和18年にかけて製作された裁縫雛形（以下、雛形ともいう）を約4300点収蔵している。このうち2290点が、教科書や製作道具61点とともに、国の重要有形民俗文化財に指定されている（平成12年12月27日指定）。文化財指定10周年を記念して、平成22年には特別企画展「重要有形民俗文化財指定10周年記念 渡辺学園裁縫雛形コレクション」を開催した。

この企画展にあたって念頭に置いたのは、学生の製作品である裁縫雛形がなぜ国の文化財になったのか、という問いであった。そこで、裁縫雛形の特徴や考案された経緯を基本事項として押さえ、また服飾史的・教育史的価値を再確認しながらも、裁縫雛形が学生の製作品であることを強調することを心がけた。それをもっとも分かりやすい形で展示したのが、「卒業までの製作点数」というコーナーで、一人の学生が在学中に製作した98点の雛形を、ひとつのケースに展示し、一望できるようにした。展示したのは、大正7年に本学の前身である東京裁縫女学校の高等師範科を卒業した高柳やそいさんの雛形である（写真1）。数ある雛形のなかから高柳さんの製作品を選んだ理由として、大半の雛形に製作時の学年が墨書されていること、本人が使用していた「教授細目」（後で詳しく述べる）が3年間分残されていること、の2つが挙げられる。

本展の開催中、思いもよらない幸運が舞い込んだ。展示を見て「自宅に同じものがある」と気づいた方から、新たに裁縫雛形が寄贈されたのである。行李いっぱい詰まった雛形は全部で102点、製作者は大正7年に高等師範科を卒業した宮尾元さん、つまり高柳さんと同級生である。製作品を比べてみると、ほぼ同じものを製作しているが、いくつか相違点がみられた。

この展示と寄贈をきっかけに、教授細目と実際に製作された雛形との比較、また同年・同科に在籍した学生の雛形の比較を行う機会を持つことができた。本稿では、これらの比較を通して確認できた事柄を報告し、雛形を用いた当時の裁縫教育の実態に迫る。



写真1 「重要有形民俗文化財指定10周年記念 渡辺学園裁縫雛形コレクション」展示風景より
「卒業までの製作点数」のコーナー

2. 調査対象について

(1) 裁縫雛形について¹⁾

裁縫雛形は、本学の前身である和洋裁縫伝習所、東京裁縫女学校、東京女子専門学校の教育課程の中で製作された、衣服や生活用品等のミニチュアである。製作には主に、本学の校祖渡邊辰五郎が明治7年頃に考案した「雛形尺」という、鯨尺2尺を7寸、つまり約1/3の長さに縮小した縮尺が用いられた。雛形尺を用いれば、縮尺を計算することなく、実物を製作するのと全く同じ方法によって、実寸法の約1/3、大きさにして約1/9の雛形が出来上がる。雛形を用いた裁縫教育は、材料と時間が節約でき、短期間で多種多様な縫い方を習得できることから大変好評であった。製作された雛形の種類は実に様々で、和装の長着や袴、洋装のシャツやズボンといった生活に必要な衣服はもとより、弁護士服や手術衣等の職業着、十二単や袴等の有職類まで含まれ、文化財に指定された資料に限ってもその数は384種にのぼる。小さいながらも完全な形の服を製作することで、自分一人で寸法を割り出し、布を裁ち、仕立てる力を養い、卒業後すぐに役立つ技術を身につけることができた。

雛形は、教師が授業で見本として使用する場合もあったが、基本的には課題として学生が製作したものである。完成した雛形には、製作者の所属・学年・氏名、品名等が、製作者によって墨で直接書き込まれる。指導者の厳しい評価を経て、合格すると「検印」が押され、製作者のもとに返却

される。検印には、学校印、所属学科の印、指導者の印等がある。この「墨書」と「検印」は、本学で製作された雛形であるという証になり、また名称や製作年を確定する上で重要である。

(2) 教授細目について

教授細目は、裁縫の授業で1年間に製作する品目の名称と時間数を一覧にしたもので、今でいうカリキュラムに相当する。また合格した品目に検印が押され、学習の進捗状況が分かるようになっている形式のものもある。「雛形」だけでなく、「部分縫」「実物」等の製作品も記載されている。「本細目の排列は教授の順序にあらず故に實物の如き寒暑により材料を得る難易あるを以ていづれより著手するも妨なし○都合に依り多少増減することあるべし²⁾」とあり、必ずしも教授細目通りではなく、状況に応じて授業が行われていたことがうかがえる。

現在、教授細目を知る手立てとして主に二つの形式がある。ひとつは、『私立東京裁縫女学校一覧』（東京裁縫女学校出版部発行）に収録されている形式である。『私立東京裁縫女学校一覧』は、同窓会誌である『裁縫雑誌』の特別号として不定期に発行される冊子で、学園の沿革、規則、教育設備等とともに、科ごとの教授細目が報告されている。

もうひとつの形式として、当時の学生が実際に使用した、配付物としての教授細目がある。教授細目は、年代、学科ごとに多少体裁が異なるが、基本的には1年間に製作する実物・雛形他の名称や製作時間数が書かれ、卒業生の話によれば、その年の初めに配られたとのことである。現在当館では29枚の教授細目を収蔵しており、ほぼ全てが卒業生からの寄贈品で、裁縫雛形とともに寄贈されたものも少なくない。本稿で取り上げている高柳やそいさんは、高等師範科在学中に使用した3年間分の教授細目3枚を雛形とともに寄贈して下さった。(写真2)

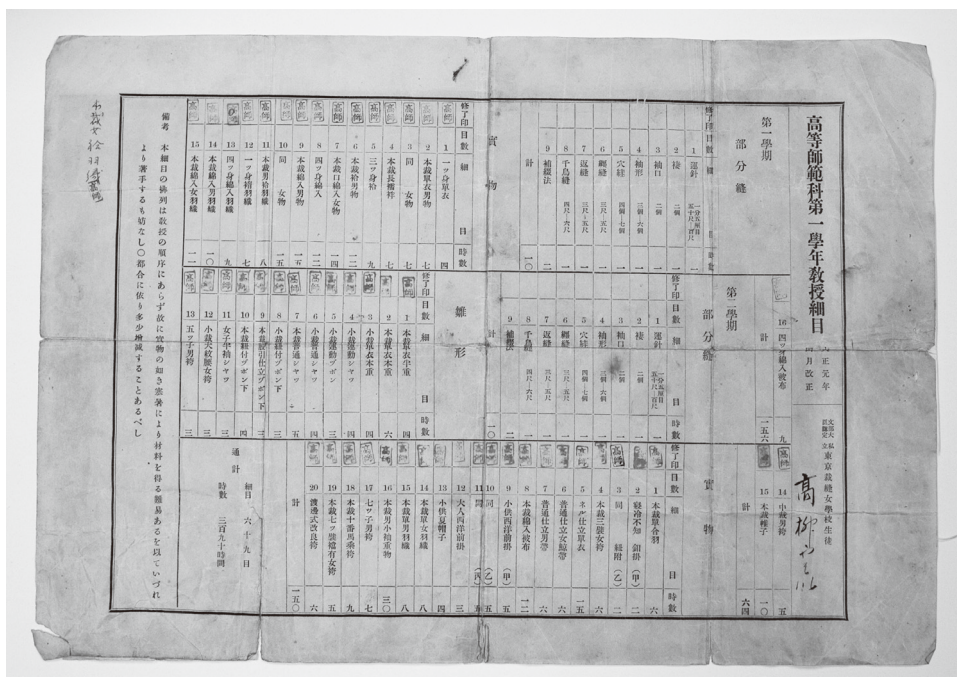


写真2 高柳さん使用の教授細目（高等師範科 第一学年）

『私立東京裁縫女学校一覧』掲載の教授細目が公的な性格であるのに対し、実際に使用されていた教授細目は、修了した品目に修了印が押されていたり、細目以外に製作した品目が欄外に書き込まれていたり、個々人の学習の様子が表れている。これらは、同時に寄贈された雛形について整理・調査する際、非常に重要な情報源となる。

(3) 大正7年頃の高等師範科について

高等師範科は、女子師範学校、高等女学校の裁縫科及び家事科の教員養成をおもな目的とし、明治41年に設置され、大正11年まで続いた。大正6年発行の『私立東京裁縫女学校一覧』³⁾によれば、入学資格は、修業年限4ヶ年以上の高等女学校を卒業した16歳以上の女子で、修業年限は3ヶ年であった。学生数は、全学生1202名のうち、高等師範科1年生は188名、2年生は78名、3年生は59名。学科課程として、裁縫のほか、修身、教育、国語、衣類整理、家事、割烹、作文が挙げられている。

高柳やそいさんが使用していた教授細目には、大正元年四月改正と記載がある。「部分縫」「実物」「雛形」「和服実物及雛形」「男洋服製図及裁縫」「女洋服製図及裁縫」「古代服及実物」の項目があり、製作する品名と製作時間数が記されている。これらあわせると、第1学年で69品目、第2学年で90品目、第3学年で40品目、計199品目を製作することになっている。このうち「雛形」あるいは「実物及雛形」として挙げられているのは、69品目である。同時期の他学科と比べて、十二単や束帯等の「古代服」や、看護婦服、手術衣等の職業服を製作するのが大きな特徴である。

(4) 高柳やそいさん製作の雛形について

平成4年に高柳やそいさんのご息女である細井良子氏より寄贈。106点が重要有形民俗文化財の指定を受けている。⁴⁾

高柳さんは、明治29年静岡県に生まれ、大正4年に東京裁縫女学校の高等師範科に入学した。幼い頃から裁縫が大変好きで、色々と学校を調べ本学への入学を決めた。大正7年の3月に高等師範科を卒業、その4月に、文部省の裁縫科教員免許状を取得。以来、小学校教諭や講習会講師等を勤め、昭和3年には裁縫塾を開き、長きにわたって裁縫教育に携わった。⁵⁾

(5) 宮尾元さん製作の雛形について

平成22年に102点寄贈。製作者宮尾元さんの入学年等は定かではないが、大正7年の卒業生名簿に記載がある。寄贈者は、宮尾元さんの兄弟の孫にあたる宮尾茂雄氏で、現在東京家政大学家政学部栄養学科の教授であるが、宮尾元さんが本学の出身であることは全く知らなかったとのことで、奇縁に驚かれていた。「重要有形民俗文化財指定10周年記念 渡辺学園裁縫雛形コレクション」展を機に、自宅で保管していた「人形の服」が裁縫雛形であることを知り、会期中の10月25日に行き先をひとつ担いで当館を訪ねてくださった。

3. 結果

高柳さん使用の教授細目に対応させる形で、高柳さん、宮尾さんが製作した雛形の一覧を表1にまとめた。教授細目について、「部分縫」と「実物」の項目は除いたが、実物の項目に挙がっている品目のうち雛形が製作されているものについては、末尾に別表としてまとめた。

表1 教授細目と製作品の比較

教授細目				高柳			宮尾					
学年	学期	種類	番号	品名	教授細目との一致	墨書の品名・製作学年	備考	教授細目との一致	墨書の品名・製作学年	備考		
第1学年	第2学期	雛形	1	本裁単衣半重	○	本裁単衣半重	-		○	本裁単衣半重	-	
			2	本裁単衣本重	○	単衣本重	-	他「左半身」1点	◎	本裁単衣本重	-	他「左半身」1点
			3	小裁単衣本重	○	小裁単衣重	-		△	小裁単衣本重	2	
			4	小裁運動シャツ	○	小児運動シャツ	-		◎	小裁運動シャツ	1	
			5	小裁運動ズボン	○	運動ズボン下	-		◎	小裁運動ズボン	1	
			6	小裁普通シャツ	○	五六才普通シャツ	-		◎	普通小裁シャツ	1	
			7	本裁普通シャツ	○	大人普通シャツ	-	他1点	◎	普通大人シャツ	1	他1点
			8	小裁紐付ズボン下	○	小裁ズボン下	-		○	小児ズボン下	-	
			9	本裁股引仕立ズボン下	○	胯上股引仕立ズボン下	-		◎	胯上股引仕立ズボン下	1	
			10	本裁紐付ズボン下	○	大人紐付ズボン下	-	他1点	○	大人ズボン下	-	他1点
			11	女子半袖シャツ	○	大人婦人シャツ	-		○	婦人シャツ	-	
			12	小裁大紋腰女袴	○	五・六才大門腰女袴	-		○	小裁大紋腰女袴	-	
			13	五ツ子男袴	○	五ツ子男馬乗袴	-		◎	(五ツ子男袴)	1	
			14	中裁男袴	◎	中裁男馬乗袴	1		◎	(中裁男袴)	1	
			15	本裁帷子								
第2学年	第1学期	雛形	1	本裁本比翼	◎	裕比翼	2	他「半身」1点	◎	本裁女裕本比翼 半身	2	
			2	本裁附比翼					◎	本裁本比翼・附比翼	2	他「試験」1点
			3	中裁三ツ稜女袴	◎	中裁女袴	2		◎	中裁三稜女袴	2	
			4	十布遣馬乗袴					◎	十布遣馬乗袴	2	
			5	四布遣馬乗袴	○	大人男袴 四布馬乗袴	-	他1点	△	四布遣馬乗袴	3	
			6	十番馬乗袴	○	十番袴	-		◎	十番袴	2	
			7	本裁袴股引					◎	本裁男袴股引	2	
			8	水兵形運動シャツ	◎	五・六才用水兵形運動シャツ	2	他1点	◎	水兵形運動シャツ	2	他「実地試験」1点
			9	大人腰廻付ズボン下(甲)	○	脇縫目有腰廻付ズボン下	-	他1点	◎	大人腰廻付ズボン下	2	他「実地試験」1点
			10	大人腰廻付ズボン下(乙)	○	脇縫目無シ腰廻付ズボン下	-		◎	大人腰廻付ズボン下	2	
			11	大人胸當付飾シャツ	◎	胸當付飾シャツ	2		◎	大人胸當付飾シャツ	2	

		教授細目		高柳			宮尾			
第2学年	第1学期	雛形	12	大人太鼓胴飾付シャツ	◎	大鼓胴飾シャツ	2	◎	大人太鼓胴シャツ	2
			13	本裁男裕道行	○	男道行	-	◎	本裁男裕道行	2
			14	大夜着	○	大夜著	-	◎	大夜著	2
			15	袖無(*1)夜着	○	袖無夜著	-	◎	袖無夜著	2
			16	看護服及び帽子	◎	看護婦服・看護帽	2	◎	看護服・看護帽	2
			17	手術衣(甲)	◎	醫師手術衣	2	◎	手術着	2
			18	手術衣(乙)	◎	醫師手術着	2	◎	医師手術着	2
			19	胞著(甲)	◎	男胞衣	2	◎	男胞衣著	2
			20	胞著(乙)	◎	女胞衣	2	◎	女胞衣著	2
			21	脚絆(甲)	△	山附脚絆	3	◎	大津脚絆	2
			22	脚絆(乙)				◎	山附脚絆	2
			23	手甲(甲)	○	手甲	-	○	裕手甲	2
			24	手甲(乙)				○	(手甲)	- 判読不明の墨書あり
			25	手刺				◎	手刺	2
			26	腹掛(甲)	△	腹掛	3	◎	裕腹掛	2
			27	油単(甲)	◎	長持油単	2	◎	箆筥油単	2
			28	油単(乙)	◎	箆筥油単	2	◎	長持油単	2
			29	油単(丙)	○	釣臺油単	-	◎	釣台油単	2
			30	暖簾(甲)	◎	切暖簾	2	◎	切暖簾	2
			31	暖簾(乙)	◎	長暖簾	2	◎	長暖簾	2
			32	涎掛(甲)						
			33	涎掛(乙)						
			34	女東コート				◎	吾妻コート	2
			35	蚊帳	◎	蚊帳	2	◎	蚊帳	2
			36	幕幟(甲)	◎	雄幕	2	◎	雄幕	2
			37	幕幟(乙)	◎	雌幕	2	◎	雌幕	2
			38	幕幟(丙)	◎	幟	2	◎	幟	2
			39	男女モッペイ	◎	男モッペイ、女モッペイ	2	◎	男モッペイ袴	2
			40	裁附(甲)	◎	裁付袴	2	◎	裁附袴	2
			41	裁附(乙)	◎	シャモ裁付袴	2	◎	シャモ裁附袴	2
			42	被衣	○	被衣	-	◎	被衣	-

裁縫雛形を用いた裁縫教育の実態について

教授細目		高柳			宮尾			
第2学年	第2学期 和服実物及雛形	1	女衿小袖					
		2	足袋二足					
		3	絹布十番馬乗袴					
		4	雪帽子				○ (冬帽子)	-
		5	大黒帽子				◎ 大黒帽子	2
		6	夏帽子 (甲)	○	嬰兒帽子	-	◎ 夏帽子	2
		7	夏帽子 (乙)				○ 夏帽子	- 他1点
		8	鯨带上仕立					
		9	本裁衿比翼					
		10	肩衣 (甲)	◎	中一文字肩衣	2	◎ 中一文字肩衣	2 他1点
		11	肩衣 (乙)	◎	丸形肩衣	2	△ 丸形肩衣	3
		12	袴ノ袴 (*2)	◎	(袴ノ袴 大人)	2	○ (袴ノ袴)	- 他「実地試験」袴のみ1点
	男洋服製図及裁縫	1	パンツ製図					
		2	パンツ裁縫	△	ズボン	3	△ パンツ	3
		3	コート製図					
		4	コート裁縫	△	サックコート	3	△ シングルプレステッドサックコート	3
		5	シングルプレステッドウェイスト製図					
		6	シングルプレステッドウェイスト裁縫	△	チョッキ	3	△ シングルプレステッドヴェスト	3
		7	学校制服製図					
		8	学校制服裁縫					
		9	学校外套製図					
		10	学校外套裁縫	△	制服外套・フード	3	△ 学校制服外套・フード	3
		11	水兵服製図					
		12	水兵服裁縫	◎	十一・二オセーラースコート二分ノ一 (半ズボン)	2	△ セーラースコート	3
13	半ズボン製図							
14	半ズボン裁縫	△	十一・二オセーラースコート二分ノ一	3	△ 十一二オ半ズボン	3		
15	ホワイトシャツ製図							
16	ホワイトシャツ裁縫	△	ホワイトシャツ	3	△ ホワイトシャツ	3		
17	ズボン下製図							
18	ズボン下裁縫	○	ドロワース	-	○ 大人ドロワース	-		

教授細目		高柳			宮尾						
第3学年	第1学期 女洋服製図及裁縫	1	シャツウエイスト製図								
		2	シャツウエイスト裁縫	○	シャツウエイスト	-	○	シャツウエイスト	-		
		3	ハビットバックスカー ト製図								
		4	ハビットバックスカー ト裁縫				◎	ハビットバックスカー ト	3		
		5	ハーフサークルケープ 製図								
		6	ハーフサークルケープ 裁縫	○	五六才ケープ	-	△	十一才ケープ	3 他1点		
		15	子供下着(甲)	◎	五六才シミーズ	3	○	五六才シミズ	-		
		16	子供下着(乙)	◎	五六才ドロワース	3	○	五六才ドロワース	-		
		17	子供下着(丙)	◎	五六才ベテコート	3	○	五六才ベティコート	-		
		18	大人下着(甲)	◎	大人シミーズ 四分一	3	◎	大人シミズ	3		
		19	大人下着(乙)	◎	大人ドロワース	3	◎	大人ドロワース	3 他1点		
		20	大人下着(丙)	◎	ベテコート	3	◎	大人ベティコート 1/4	-		
		21	単服(甲)	○	四五才男児服	-	○	三四才単服	-		
		22	単服(乙)	○	五六才単服	-	○	(女単服)	-		
		23	単服(丙)				○	(女単服)	- 授業外で製作か?		
		第2学期	古代服及実物	1	打着	○	袷、切袴	-	◎	袷、切袴	3
				2	十二一重	○	本長袴、裳	-	○	単、五衣、打衣、表衣、 唐衣、本長袴、裳	-
						△	単衣、五ッ衣、打着、 表着、唐衣	2			
				3	束帯	◎	下襲、表袴、襪	3	○	小袖	3
						○	白小袖、単、下袴、裾	-	○	下襲、袍、下袴、表袴、 裾	-
						△	縫腋袍	2			
				4	本裁縫小袖一重						
				5	本裁絹布男袴羽織						
6	本裁絹布女袴羽織										
7	丸帯上仕立										
8	男帯上仕立										
細目外			(十徳)有楽流	-							
			(十徳)利久流	-							
			(十徳)古織部流	-							
			布衣信	-							
			縫目無單衣	-							
			一ツ身袖無被布	-							
			丸胴着	-							
		袂箱油單	-								

裁縫雛形を用いた裁縫教育の実態について

教授細目で「実物」に記載のある品目のうち、雛形が製作されているもの

教授細目			高柳			宮尾		
第1学年 第2学期	実物	寝冷不知 釦掛(甲)	(寝冷不知 釦掛)	-		(寝冷不知釦掛)	-	実物
		寝冷不知 紐付(乙)	三・四才寝冷不知	-		(寝冷不知紐付)	-	実物
		本裁七ツ襜褕有女袴	前後七ツ襜褕女袴	2		前後七襜褕有袴	-	
		渡邊式改良袴	改良袴	-		渡邊式改良袴	1	

- ・教授細目は、高柳さん使用の高等師範科教授細目による（大正元年四月改定）
- ・項目「教授細目との一致」について、教授細目と墨書の製作学年が一致していれば◎、不一致は△、墨書に製作学年がない場合は○とした。
- ・項目「墨書の品名」について、墨書に品名がない場合は（）書きで教授細目の品名を記した。
- ・*1「袖無夜着」について、実際は「袴」と表記するが、ここでは読みの「ソデナシ」に漢字を当てた。同様に、*2は教授細目、墨書ともに「杯」だが、ここでは「袴ノ袴」とした。

4. 考察

(1) 「雛形」以外の項目における雛形の利用

前述したとおり、大正元年改定の高等師範科教授細目には、「部分縫」「実物」「雛形」「和服実物及雛形」「男洋服製図及裁縫」「女洋服製図及裁縫」「古代服及実物」の項目がある。教授細目だけを見た場合、このうち雛形が製作されるのは「雛形」「和服実物及雛形」の項目についてと考えられよう。しかしながら、教授細目と実際の製作品を対応させると、「実物」「男洋服製図及裁縫」「女洋服製図及裁縫」「古代服及実物」でも雛形が製作されていることがわかる。「実物」との関係については後述するとして、ここでは「男洋服製図及裁縫」「女洋服製図及裁縫」「古代服及実物」について見てみよう。

「男洋服製図及裁縫」「女洋服製図及裁縫」においては、男服の「学校制服」以外、ほぼ全ての細目が製作されている。「製図」は、高柳さん、宮尾さんの製作品には見られないが、平成18年に寄贈された明治38年卒業生の製作品には、110点の雛形とともに、ほぼ教授細目通りに製作された実物大の製図が含まれていた。つまり、「製図」は実物大で学び、「裁縫」では雛形を用いたものと考えられる。

雛形製作は、布地と時間の節約になるのはもちろんだが、その主眼は縫い方の習得と服の構成の把握にあると考えられる。特に各パーツを組み合わせて立体的に形作る洋服の構成を理解する際に、全体が一目で分かる雛形は適している。おそらく、標準的な寸法を把握したり、袖・身頃・襟等各パーツの寸法の関係を理解したりといった、実物の大きさが重要である点は「製図」で確認し、「裁縫」は雛形で練習したのだろう。雛形は、実物大の製作と組み合わせることによって、より効果的に用いられたものと考えられる。

「古代服及実物」は「打着」「十二一重」「束帯」が雛形で製作されている。大正2年発行の教科書『裁縫全書 十二一重の部』の諸言に「近来歴史および国語の教授が、単に文字の上の説明に止まらず、能う限りは実物標本等を示すこととなりしより、歴史的服装を作製することの必要を感じるに至れり。」⁶⁾と記されている。つまり古代服の製作は、実際に仕立てることで服への理解を深めると同時に、教職に就いた際の教材作成を意識している。歴史や国語の授業で用いられたかは不明

だが、古代服の雛形には用途や時代等を説明書きした紙が縫いつけられたものがあり、裁縫あるいは服装史の授業で標本的に使われた形跡はある。標本として用いる際、小さくて扱いやすい雛形が適当であったことは想像に難くない。

(2) 試験縫い

雛形は、基本的に1品目1点製作されるが、宮尾さんの雛形には2点製作されている品目が10件あり、そのうち「本裁本比翼・附比翼」「水兵形運動シャツ」「大人腰廻付ツボン下」「袴ノ袴」について、一方の雛形に「実地試験」または「試験」という墨書があった。

実地試験の詳細は明らかでないが、課題としての雛形製作の他に、決められた時間内に雛形を縫いあげる、正確さと速さを要求される試験が行われていたようだ。つまり、試験で取り上げられる品目は、通常の課題とあわせて、2点製作されることになる。この場合、課題で製作された雛形には墨書と検印があるが、試験縫いと考えられるもう一方には墨書が無く、複数の検印が押されていることが多い。宮尾さんのように試験であることが墨書で明記されるのは珍しい。

高柳さんの雛形にも重複して製作されている品目があるが、そのうち一方には「試験」という文字はおろか、氏名や品名も書かれていない。墨書の無い雛形は、自主練習や卒業後に製作された可能性があるため、本学の授業で製作されたと断定するには注意が必要になる。高柳さんの墨書のない雛形は、高等師範科の略である「高師」の検印があるため本学での製作品と考えると間違いはないが、それでも、きちんと墨書の書かれた一方の雛形の存在を思うと、これはどのように位置付けたらよいのだろうかという疑問はあった。

宮尾さんの雛形に「実地試験」「試験」と書かれていることで、高柳さんの墨書のない雛形の中のいくつかは、やはり試験縫いであることが明らかになった。例えば、「水兵形運動シャツ」(写真3)は、普通白地で仕立てられるが、二人とも茶色の生地で作成しており、こうした類似をみても、同じ目的で作成されたと考えられるのである。



①高柳



②宮尾 「実地試験」と墨書がある。

写真3 「水兵形運動シャツ」

(3) 雛形と実物製作について

高柳さんと宮尾さんの雛形に見られる際立った違いとして、「寝冷不知（ネビエシラズ）」が挙げられる。寝冷不知は、その名の通り、子どもが寝冷えをしないように着せるオーバーオールのような腹掛のような服である。高柳さんは雛形で、宮尾さんは実物大で製作している。（写真4）

実に多種多様な衣服が雛形で製作されているが、浴衣やいわゆる普通の着物である女物裕長着等の、日常的に仕立てる・着る機会の多い服は、おそらく実物大で製作されたため、雛形には見られない。雛形製作は、仕立てる機会の少ない服について、一通りの仕立て方を学ぶという役割が大きかったと考えられる。ある品目について実物と雛形のどちらで製作するのが効果的かという判断は、材料や時間等を考慮しながら、教師が状況をみて判断していたと推測される。ここでは寝冷不知だが、他に雛形だけではなく実物大で製作されている例として、子供西洋前掛や簡単服（子ども服）等がある。特に子ども用の服については、実物大であっても布地をそれほど使用しないため、実物大でも雛形でもどちらでもよいという扱いだっただけが見て取れる。



①「寝冷不知 釦掛」



②「寝冷不知 紐付」

写真3 雛形と実物の製作について：左が雛形（高柳製作）、右が実物大（宮尾製作）

5. まとめ

今回の調査で、教授細目と実際の製作との間に様々な形で違いがあることが確認できた。製作学年の変更や、「雛形」以外の項目における雛形の利用が見られ、また試験縫い等を含めると教授細目にはない製作品も相当数あったと推測される。教授細目は、当時の教育内容を知る上で大変重要であるが、「都合に依り多少増減することあるべし」と断り書きがあることから、それを当時の教育の実態として捉えるには慎重でなければならない。現存する雛形が製作品の全てではないことを意識しつつ、学習の成果物である雛形と教授細目とをあわせて考えることの重要性を再認識した。

また、今回の調査を通して、雛形製作と実物製作とがこれまで考えていた以上に密接な関係にあることが分かった。雛形を用いた裁縫教授法については、明治39年に作成された度量衡に関する公文書⁷⁾に、「近年小学校等で雛形を用いた教授法を少なからず目にするが、土地の状況によって実物の材料を得るのが難しい場合、または実物の準備段階の他は、勉めて実物を用いて技術を習得させるべきである」という趣旨の文章が見られる等、批判的な意見があった。しかしながら、本学の授業においては、雛形製作の利点・欠点を正確に理解し、他の裁縫教授法と組み合わせることで効果的に用いていることがうかがえた。雛形研究は、とかく雛形製作の範囲でとらえがちだが、実物や部分縫い等の他の製作品との関係の中に位置づけて考えることで理解が深まるものといえる。

高柳さんと宮尾さんの製作品を比較すると、一見ほぼ同じものを製作しているが、試験縫いの墨書の書き方や、同じ品目を実物と雛形とで製作する等、基本的なところで決して小さくない相違が見られる。このことから、同級生だったことは間違いないが、クラスは別だった可能性が考えられる。この点については、雛形に押された指導者印や記録に残っている学生の話をつたえる等、当時の教育をより具体的に描くための多方面からのアプローチが必要である。

6. おわりに

今回は、企画展での公開が寄贈につながり、しかも展示品と寄贈品が同級生の製作品であるという好機を得て雛形の比較調査を行うこととなったが、質・量ともに充実した当館の裁縫雛形コレクションは、さまざまな角度からの比較研究が可能であり、今後本格的に調査に取り組む必要性を痛感した。また、このコレクションが多くの研究に資するように、収集、保存、整理、公開を連動させて効果的に活用できるよう努めたい。

雛形を調査・研究対象とする際、博物館資料という「モノ」として一点一点に注目するか、その反対に近代女子教育における役割といった大きくくりで扱うことが多いが、今回の調査は、雛形が、机を並べた学生たちによる製作品であることを思いおこさせるものであり、当時の裁縫教育の実態にわずかながら接近できたような気がしている。

最後になりましたが、細井良子氏、宮尾茂雄氏をはじめ、当館に裁縫雛形をご寄贈くださいました方々に改めて厚く御礼申し上げます。また、写真撮影や資料探し等に快く協力してくださる当館館員にこの場を借りて日頃の感謝の意を表します。

註

- 1) 裁縫雛形については、重要有形民俗文化財 渡辺学園裁縫雛形コレクション 上・下巻, 東京, 東京家政大学博物館, 2001, 上巻 179p, 下巻 1207pに詳しい。
- 2) 「高等師範科第一學年教授細目」大正元年改定 私立東京裁縫女学校発行
- 3) 私立東京裁縫女学校一覽, 東京, 東京裁縫女学校出版部, 1915.
- 4) 裁縫雛形の数え方について、『重要有形民俗文化財 渡辺学園裁縫雛形コレクション 上・下巻』および現在の当館の資料整理要項では、組みやセットになるもの(例: 袴、小裁運動シャツ・ズボン)は基本的に1点と数えるが、一方が欠けている場合等、それぞれを1点と数える場合もある。

裁縫雛形を用いた裁縫教育の実態について

本稿では、教授細目の表記に対応するように製作品を挙げたため、例えば「小裁運動シャツ」と「小裁運動ズボン」を分けて数え、2点としている。よって、製作点数が『重要有形民俗文化財 渡辺学園裁縫雛形コレクション 上・下巻』や企画展の際公表した数と若干異なる場合がある。

- 5) 高柳やそいさんの経歴については、昭和51年にテープに録音されたご本人の話に基づく。東京家政大学創立90周年にあわせ、当時の附属図書館資料室室長で本学の校祖渡邊辰五郎の孫である渡辺篤の呼びかけにより、昭和45年から数年間にわたり集められた「卒業生の声」の一部である。掲載については、学園の歴史を後世に伝えることを目的とした話の性質上、録音が行われた時点で承諾されたものとしている。
- 6) 渡邊滋（編）、裁縫全書 十二一重の部、初版、東京、東京裁縫女学校出版部、1913、p.1.
- 7) 「文書類纂 明治三十九年 度量衡」（東京都公文書館 蔵）

